

### 39. <いちばん大事なこと>

表題は「バカの壁」の著者として有名な養老孟司氏が環境問題について2003年11月に著した本のタイトルです。余暇の穴埋めにと4冊ほどまとめ買いした1冊で、著者と“環境問題”の結び付きに興味を引かれて選びましたが、読み始めたのは4冊の最後でした。

氏は、環境問題を「自然環境」対「人間社会」という図式でとらえるのが間違いで、「自然」と「人工」の関係で考えるべきだとしています。また、人工の典型を都市として、次のように述べています。

『都会には、人間のつくらなかつたものは置かれていない。樹木ですら都会では人間が「考えて」植える。草が「勝手に」生えると、それを「雑草」というのである。他方、人間の体は自然に属している。身体は意識的につくつたものではないからである。・・・』

人体も自然に区分しているのは、医師である氏の独特の視点でしょうか。さらに、環境問題の始まりを次のように指摘しています。

『自然と対立するものとしてとらえられている人間とは、現代の人間、つまり都市社会の人である。・・・対立しているのは、じつはヒトの脳の代表的な働きである意識と、意識が作り出したものではない自然である。・・・自然と人工が対立するものとなり、世界が二つに分かれるようになったのは、都市化が進んだためである。・・・』

「バカの壁」と相通じる視点を感じます。本の最後では環境問題へのアプローチの仕方に触れています。

『環境問題の(自然を理解する)むずかしさは、それがシステムの問題だということにある。・・・第一の段階は、自然や社会といったシステムを情報化すること・・・。第二段階とは、その情報を整理して、意味のある情報と、意味のない情報をより分けること・・・広い意味での情報処理・・・。第三段階は、そうした情報処理に基づいて、どういう治療をするか、それを決定すること・・・。環境問題では、人々それぞれが医師

である。医療では、検査するのは技師である。同じようにいうなら、環境では、技師に相当するのは、各分野の専門家である。・・・環境問題について、多くの人が自分が医師だとは思っていない。・・・』

概念的なテーマをつまみ食いして紹介したので、内容が十分伝えられたとは思いませんが、学生時代に武谷三男の「技術論」を読んで以来かなりの覚醒の思いでした。

氏は本の冒頭で、あえて「自分は“虫取り”である」と宣言して話をはじめています。私の子供の頃、“虫好き”は田舎でも変り者であったように思います。虫といえ、ハエや蚊、毛虫、イモムシ、バッタなどが日常で、カブトムシやクワガタ、ホタルなどは別格でした。普段から「虫は“害虫”、“毒虫”であり、不潔なもの遠ざけたいもの」と教えられていた、ですから、総じて田舎の子供は虫嫌いで、心の中では虫のいない“清潔で華やかな都会”にあこがれていたように思います。同世代の友人には、虫を生理的に受け付けなくなった“田舎生まれの貴婦人”もいらっしゃいます。エイズやノロウイルスなどの感染症多くが人から人へ直接移ることが周知された今でこそ、「田舎とどっちが“清潔で安全”だか分からない」と思うようになっていますが、当時は違っていました。だから、“虫取り”でなかった私は、何十年来環境畑で働いていながら、氏の発想には至らなかったのかもしれませんが。

今でも野外で出会う虫は平気ですが、家の中のゴキブリは大の苦手になっています。自然と人工・・・、自分がすっかり都会に取り込まれていることをわからせてくれた本でした。

< 川口 幸男 >

※No. 43号(2005/8/12)に掲載